

逆接条件文に関する一考察

—その論理構造をめぐって—

安 善柱

キーワード：逆接条件、論理構造、 p ナラバ q 、 $\sim p$ テモ q 、 p テモ $\sim q$ 、 p ノニ $\sim q$

1 はじめに

本稿は、「テモ」「ノニ」の論理構造を調べようとするものである。例えば、

- (1) 努力しても、成功しない。
- (2) 努力したのに、成功しなかった。

は、逆接条件文、または譲歩文と呼ばれているが、「テモ」や「ノニ」によって、(1)と(2)のそれぞれの前件と後件がどういう結び付きになるのかを調べようとする、話者の想定している条件文と「テモ」「ノニ」との論理関係を考慮に入れざるを得なくなる。「テモ」「ノニ」の論理構造を論理式で示すことで、曖昧な記述が避けられると思われる。

2 逆接条件文¹⁾とは

小泉(1987)は、譲歩文は、前件の条件が満たされたのに期待される結果が得られなかったことを表明する文である、とし、事實的譲歩文では「ノニ」が、その他の予測的もしくは反事實的譲歩文では「テモ」が用いられている、としている²⁾。

一方、鈴木(1978)は、「～のに」は規定の逆接条件を表わすもので、その特徴は、「当然そうなるはずなのに、期待に反し、実際はそうならず、意外だ、不服だ」という意味あいの事がらを述べるところにある、とし、「～ても」にはある事がらを仮定して示し、その条件から拘束を受けることなく、後件で述べる事がらが成立するという関係を示す用法がある、としている³⁾。

前件を「 p 」、後件を「 q 」、 p や q の否定を「 \sim 」とすると、小泉は「 p テモ[ノニ] $\sim q$ 」を、鈴木は「 p ノニ $\sim q$ 」と「 $\sim p$ テモ q 」を指していると思われる。このように今までの研究では、「テモ」「ノニ」はともに逆接条件を表わすと見ているものの、特に「テモ」に関する見方は分かれていることが分かる。「テモ」の後件の成立如否が問題になるわけで

あるが、これは「テモ」がある条件文を前もって想定していることを意味するものだと思う。つまり、話し手や聞き手は逆接条件テモを、条件文「 p ナラバ q 」に照らして、「 $\sim p$ テモ q 」と見るか、それとも「 p テモ $\sim q$ 」と見るかなのである。

本稿では、「テモ」「ノニ」は「 p ナラバ q 」を想定してこそ逆接条件の読みができる言語形式だと見なす。そして、「テモ」は、想定条件文と同じように q の成り立つ「 $\sim p$ テモ q 」を後件肯定型、 q が想定条件文通りにならない「 p テモ $\sim q$ 」を後件否定型とそれぞれ呼ぶことにする。「ノニ」は、「 p ノニ $\sim q$ 」型しかなく後件否定型「 p テモ $\sim q$ 」とは区別しておく。但し、例えば、「 p ナラバ q 」が「努力しなければ成功しない」であって元々後件 q を否定の形として想定していた場合、想定条件文の後件と同じ形の「努力しても成功しない」は後件肯定型、想定条件文の後件が否定されている「努力しなくても成功する」は後件否定型のように見なすことにする。これを表でまとめると、以下のようになる。

<表1>

	テモ		ノニ
	後件肯定型	後件否定型	
逆接仮定条件			×
逆接確定条件	$\sim p$ テモ q	p テモ $\sim q$	p ノニ $\sim q$
反事実譲歩文			×

これから、後件肯定型「 $\sim p$ テモ q 」と後件否定型「 p テモ $\sim q$ 」、そして「 p ノニ $\sim q$ 」のそれぞれの論理構造を調べることにする。

3 逆接条件文の論理構造

「テモ」「ノニ」の論理構造を論理式で表わす前に、本稿で扱っている論理記号について簡単に触れておきたい。

条件の論理概念には、含意、逆含意、等値、後件肯定がある。つまり、日本語「ナラバ」は実際これら四つの論理概念のうちのどれかの意味を持って文に現われるのである。例えば、草薙(1977)は、「明日雨ならば、一日中家にいる」は含意、「もしも酸素があるならば、硫黄は燃焼する」は逆含意だとしている。また、本稿で使っている論理概念に連言と選言がある。これら六つの論理概念のそれぞれの真理値を示した真理表は以下の通りである。ここで、1は真、0は偽を表わし、論理記号は草薙(1977、1983)に従う。

p	q	$p \supset q$
1	1	1
1	0	0
0	1	1
0	0	1

p	q	$p \leftarrow q$
1	1	1
1	0	1
0	1	0
0	0	1

p	q	$p \equiv q$
1	1	1
1	0	0
0	1	0
0	0	1

p	q	$p \perp q$
1	1	1
1	0	0
0	1	1
0	0	0

p	q	$p \wedge q$
1	1	1
1	0	0
0	1	0
0	0	0

p	q	$p \vee q$
1	1	1
1	0	1
0	1	1
0	0	0

そして、ある複合命題Pが別の複合命題Qを含意し、その真理値が常に真である場合、これを論理的含意と呼び、「 $P \Rightarrow Q$ 」と表わす(草薙1983;76)。

3. 1 後件肯定型「 $\sim p$ テモq」の論理構造

草薙(1977)⁴⁾は、後件肯定型テモとノニを論理式で示し、論理構造と言語形式との関係を表わしているが、後件肯定型テモのうち、逆接仮定条件は「 $p \perp q$ 」で、反事実譲歩文は「 $(p \perp q) \cdot \sim p \Rightarrow q$ 」⁵⁾でそれぞれ表わしている。但し、草薙は、後件肯定型テモを「pテモq」とし、前もって「pナラバq」を想定してはいないため、後件肯定型といえども本稿の「 $\sim p$ テモq」との間にはズレがある。つまり、草薙の反事実譲歩文テモの論理式「 $(p \perp q) \cdot \sim p \Rightarrow q$ 」は、「pに関係なくqは成立する。 $\sim p$ である。だからqである。(pに関係なくqは成立するので、たとえpテモqであろう)」を表わしており、これは「pテモq」であって「 $\sim p$ テモq」ではないのである。とはいっても、「pテモq」と「 $\sim p$ テモq」はどちらも、結局「pでも $\sim p$ でもq」を表わすところは同じであるため、その論理構造は同じである。

後件肯定型の逆接仮定条件「 $\sim p$ テモq」は、前件pに関係なく後件qが成り立つ。これは、前もって想定していた条件文「pナラバq」のpの他に $\sim p$ もqと結び付くところに意外さを感じ、逆接条件と受け取ることになるのである。これは「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q)$ 」⁶⁾のように表わせるが、これは、pが真でqも真の時または、pが偽でqが真の時、真になる論理構造をしており、pが真でも偽でもqは真になる、まさに後件肯定型の論理構造である。実例を見ることにする。

(3) この吹雪では、タクシーは拾えないだろうし、無線タクシーを頼んでも予約でいっぱいになっていて、時間がかかるに違いない。 『女』(上)

上の例文は、急いで約束場所へ行こうとするが、吹雪でどうも間に合いそうもない場面である。上の文が表わそうとする意味内容は、

(3) (約束場所までタクシーで行こうとしなければ間に合わない。ところが、)この吹雪ではタクシーで行こうとしても普通のタクシーは拾えなかったり、無線タクシーは予約でいっぱいになっていたりで間に合わないだろう。

のようなものであろう。ここで、 p は「タクシーで行こうとしない」、 $\sim p$ は「タクシーで行こうとする」、 q は「間に合わない」になる。(3)は、「約束場所までタクシーで行こうとしなければ間に合わないだろう」と想定していたのが、実際「約束場所までタクシーで行こうとしても間に合わない」ことになり、想定条件文との食い違いが逆接として受け取られる構造の文である。想定条件文と実際の事柄の組み合わせが「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q)$ 」の構造をしており、「タクシーで行こうとしなくても間に合わない」を表わしている。この「タクシーで行こうとしなくても」は「何をしても」に繋がり、結局これは「前件はどうであれ」を意味することになる。

ところで、多くの場合、「 $\sim p$ テモ q 」の文中、または文の前後には、想定「 p ナラバ q 」が「 $\sim p$ テモ q 」になる、理由めいた語句が示される。(3)では、無線タクシーを頼んでも時間がかかる理由は「予約でいっぱいになっているだろう」からであり、無線タクシーを頼もうとする理由は「普通のタクシーが拾えないだろう」からである。また、普通のタクシーが拾えなかったり無線タクシーが予約でいっぱいになっているだろうと思わせる理由は「この(ような、すごい)吹雪だ」からである。そして、この理由の語句は「こんなに吹雪がひどければ」のような条件節の形で逆接条件文の前に付くこともできる。

(4) 母と綾子の気持は一致している。「お正月ぐらい家事から解放されたい」別に正月でなくても、一年中、手抜きだらけの家事ではないか、慶子は母をからかってやりたかったが、黙っていた。『女』(上)

(4)は、母の家事に不満を抱いている主人公の慶子を含め親子三人がお正月をどう過ごすかについて話し合っている場面である。「正月である」が p 、「正月でない」が $\sim p$ 、「手抜きだらけの家事である」が q だとすると、(4)のテモは、「正月であれば、手抜きだらけの家事になる[である]」を想定していて、この想定条件文とのズレを表わしている文だと言える。但し、(4)は、実際 $\sim p$ かつ q である逆接確定条件「 $\sim p$ テモ q 」であり、「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q) \vee (\sim p \wedge q)$ 」で表わせる。これは、「 p が真でも偽でも q は成り立つが、現に

「 $\sim p$ でありかつ q である」つまり、「正月であっても正月でなくても手抜きだらけの家事であるが、今現在正月ではなく手抜きだらけの家事である」といったことだろう。この「正月であっても正月でなくても」は「いつも」ということで、これは文中の「一年中」からも分かる。この「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q) \vee (\sim p \wedge q)$ 」は、逆接仮定条件「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q)$ 」と等値である、後件肯定型の論理構造である。

(5) もしあの五月の日曜日に中央線の電車の中でたまたま直子に会わなかったら僕の人生も今とはずいぶん違ったものになっていただろうな、と僕はふと思った。そしてそのすぐあとで、いやもしあのとき出会わなかったとしても結局は同じようなことになっていたかもしれないと思なおした。たぶん我々はそのとき会うべくして会ったのだし、もしあのとき会っていなかったとしても、我々はべつどこかで会っていただろう。とくに根拠があるわけではないのだが、僕はそんな気がした。 『森』(上)

(5)の実線部の「テモ」では、「あのとき(直子に)出会う」が p 、「あのとき(直子に)出会わない」が $\sim p$ 、「(今)同じようなことになる」が q である。ただ(5)の実線部の「テモ」は、「現に、あのとき直子に出会って、今このような状態にある」という状況を表わしており、前件で事実と反対の事柄を仮定している。この「テモ」は、偽である p つまり、 $\sim p$ を仮定してそれでも q は前提通りに成り立つということを表わす後件肯定型の反事実譲歩文である。このような反事実譲歩文は「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q) \wedge (p \vee \sim p) \equiv q$ 」で表わせる。この論理式の中の「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q)$ 」は、 p が真でも偽でも q が真になるものであるため、この「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q) \wedge (p \vee \sim p) \equiv q$ 」は、「 p でも $\sim p$ でも q であり、実際 p または $\sim p$ である。これは q と等値である」が表わせるのである。この論理式は、逆接仮定条件「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q)$ 」や逆接確定条件「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q) \vee (\sim p \wedge q)$ 」と等値である。

(5)の実線部の「テモ」のような後件肯定型の反事実譲歩文と、(5)の点線部の「タラ」のような反事実条件文との事実関係は同じである。(5)の点線部の反事実条件文は、実際「直子に会って」、「今のような人生になっている」のであり、(5)の実線部の反事実譲歩文も、実際は「あのとき直子に出会って」、「今のようにになっている」のである。反事実条件文は、「 $(p \equiv q) \wedge p \Rightarrow q$ 」で表わせるが、 p と q が現に成り立っているということは、後件肯定型の反事実譲歩文「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q) \wedge (p \vee \sim p) \equiv q$ 」と変わらないのである。但し、「 $(p \equiv q) \wedge p \Rightarrow q$ 」の中の「 $p \equiv q$ 」は、「 p の時 q 、 $\sim p$ の時 $\sim q$ 」であり、「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q)$ 」

$\wedge (p \vee \sim p) \equiv q$ の中の「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q)$ 」は、「 p の時 q 、 $\sim p$ の時 q 」であるため、前者は反事実条件文として、後者は反事実譲歩文としてそれぞれ現われるのである。反事実条件文であれ反事実譲歩文であれ、事実と反対の事柄を仮定している形式ではあるが、反事実条件文は前後件ともに偽であるのに対し、反事実譲歩文は前件は偽、後件は真になるのも、このような論理構造の違いから出てくることと考えられる。

ところで、(5)の波線部の「テモ」は逆接条件ではない。つまり、この「テモ」は、「 p ナラバ q 」の「ナラバ」をそのまま「テモ」に置き換えた「 p テモ q 」に当たるものであり、「 p ナラバ q 」を強調する場合に使われる順接条件なのである。この「 p テモ q 」については別稿に譲りたい。

3. 2 「 p テモ $\sim q$ 」の論理構造

「 p テモ $\sim q$ 」も「 $\sim p$ テモ q 」と同じく、話し手や聞き手は「 p ナラバ q 」を前もって想定していると思われる。但し、「 p テモ $\sim q$ 」は、想定 of 条件文が成り立たないところに期待はずれを覚え、逆接条件として受け取る文である。逆接仮定条件「 p テモ $\sim q$ 」は、「 $(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q)$ 」で表わせる。この「 $(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q)$ 」は、 p が真で q が偽の時または、 p が偽で q が偽の時に真になる、まさに後件否定型の論理構造である。

(6) 連休のあいだ取引先も人けがまばらな状態で、正直なところ、渉外にまわっても、成果はあがらない。しかし、問題は、気持、である。ヤル気、である。『女』(上)

ここでは、「渉外にまわる」が p 、「成果があがる」が q 、「成果があがらない」が $\sim q$ だと見ることができる。そして、(6)は、「渉外にまわれば、成果があがる」という想定下で、 p が成り立てば q も成り立つはずが $\sim q$ になっており、想定 of 条件文が成り立たないことを表わす「 $(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q)$ 」の論理構造を持っていると言えよう。但し、後件否定型の場合は、想定 of 条件文の誘導推論⁷⁾「 $\sim p$ の時 $\sim q$ 」と、「 p の時 $\sim q$ 」が共に成り立つところに逆接の読みが出てくると思われる。つまり、「 p ナラバ q 」から「 $\sim p$ の時 $\sim q$ 」は導き出されても、「 p の時 $\sim q$ 」は出てこないのである。「 p テモ $\sim q$ 」は「前件 p に関係なく、後件 q は成り立たない」ことであり、「 p ならば q であり、 $\sim p$ ならば $\sim q$ である。それなのに、 p でも $\sim q$ であり、論理的に合わない」ことを表わすと思われる。

後件否定型「 p テモ $\sim q$ 」も後件肯定型「 $\sim p$ テモ q 」と同じく、想定している条件文

「pナラバq」が成り立たない理由が文中に現われることが多く、(6)では、「連休のあいだ取引先も人けがまばらな状態で」という理由節が示されている。

(7) 昔は、雪が降っても傘などささなかった、おぼえていますか？ 『女』(上)

(7)は、「雪が降る」をp、「傘をさす」をq、「傘をささない」を $\sim q$ とし、「雪が降れば傘をさす」を前もって想定しての文だと言える。但し、(7)は(6)とは違って、前後件が現に行われている逆接確定条件である。これは、「 $(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q) \vee (p \wedge \sim q)$ 」で表わして、「pならばqであり、 $\sim p$ ならば $\sim q$ であるはずなのに、pでも $\sim q$ とは論理的に合わない。ところが、現にpでありかつ $\sim q$ である」つまり、「雪が降れば傘をさすはずだが、雪が降っても傘をささない。雪が降った。傘をささなかった」の意味内容を持っていると言えよう。そして、この論理式と逆接假定条件「 $(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q)$ 」は等値である。

(7)では、時を表わす「昔」が、「pナラバq」が「pテモ $\sim q$ 」になる理由をほのめかしていると思われる。しかし、次のように、文中には理由の含みがなく、前後の文脈からその理由を汲み取るしかない場合もある。

(8) 一週間たっても電話はかかってこなかった。 『森』(上)

(9) 水曜日の十二時になっても緑はそのレストランに姿を見せなかった。 『森』(上)

(8)や(9)は、想定している条件文が成り立たない理由が話し手に分からないため、理由めいた語句が現われにくい場合である。

(10) もっとも彼が隠れた古典小説の読書家であることは寮内ではまったく知られていなかったし、もし知られたとしても殆んど注目を引くことはなかつたろう。 『森』(上)

(10)は、「(彼が隠れた古典小説の読書家であることが寮内で)知られれば、注目を引く」を想定しており、「(彼が隠れた古典小説の読書家であることが寮内で)知られる」がp、「注目を引く」がq、「注目を引かない」が $\sim q$ になっている「pテモ $\sim q$ 」形式である。ただ、(10)は(6)や(7)と違って前件で事実と反対の事柄を述べている反事実譲歩文であり、「 $(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q) \wedge (p \vee \sim p) \equiv \sim q$ 」の論理構造を持っていると思われる。つまり、(10)は、

「pでも～pでも～qであり、実際pまたは～pである。これは～qと等値である」を表わしているのである。この論理式は、逆接仮定条件「 $(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q)$ 」や逆接確定条件「 $(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q) \vee (p \wedge \sim q)$ 」と等値であり、pが真でも偽でもqは偽である。これは、実際～p「(彼が隠れた古典小説の読書家であることが寮内で)知られない」かつ～q「注目を引かない」であるが、たとえp「(彼が隠れた古典小説の読書家であることが寮内で)知られる」でも～qだからである。また、この論理式の中の「 $(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q)$ 」からも分かるように、反事実譲歩文「p テモ～q」は後件がいつも偽になる後件否定型である。

3. 3 「pノニ～q」の論理構造

草薙(1977)は、「ノニ」を「 $p \cdot \sim q \equiv (p \supset q)$ 」のように表わしている。本稿でも草薙を受け継ぐが、「 $p \wedge \sim q \equiv (p \supset q)$ 」のように示しておく。「pノニ～q」は、「実際pかつ～qであって、これは「pならばq」の否定である」という逆接確定条件を表わしている形式である。

(11) 「ワタナベ君、あなたってすごいわねえ」と縁は感心して言った。「あのものを食べなくてそれでみんなすごく苦勞してるのに、キウリまで食べさせちゃうんだもの。信じられないわね、もう」 『森』(下)

(11)は、「(あの人にもものを食べさせるのに)みんな苦勞する」がp、「あなたも苦勞する。(もちろんあなたはあの人にキウリを食べさせられない)」がq、「あなたは苦勞しない。(あなたはあの人にキウリが食べさせられる)」が～qである。これは、「(あの人にもものを食べさせるのに)みんな苦勞すれば、あなたも苦勞する」を想定しての文であり、「(あの人にもものを食べさせるのに)みんな苦勞すれば、あなたも苦勞するはずだが、みんなは苦勞してもあなたは苦勞しない。現にみんなは苦勞している。現にあなたは苦勞せずあの人にキウリまで食べさせた」という意味内容を持っている。

ところで、逆接確定条件とは言えども、「p テモ～q」の「 $(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q) \vee (p \wedge \sim q)$ 」と「pノニ～q」の「 $p \wedge \sim q \equiv (p \supset q)$ 」とは異なっている。つまり、「 $(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q) \vee (p \wedge \sim q)$ 」は、pが真または偽でqが偽の時、真になる論理構造を持っている反面、「 $p \wedge \sim q \equiv (p \supset q)$ 」は、pが真でqが偽の時だけ真になり、pとqが共に偽の時は偽になる論理構造になっている。例えば、「努力すれば成功する」を想定した「 $(p \supset \sim q) \wedge$

$(\sim p \supset \sim q) \vee (p \wedge \sim q)$ 」は、「努力しなくても成功しなかっただろうけど、努力しても成功しなかった」を表わしている。一方、同じく「努力すれば成功する」を想定した「 $p \wedge \sim q \Rightarrow \sim (p \supset q)$ 」は、「努力すれば成功するはずが、努力したのに成功しなかった」を表わしており、「努力しなかったのに成功しなかっただろうが、努力したのに成功しなかった」を表わしているのではない。

それはそうと、研究会グループ(1986)からも分かるように、「ノニ」を細分類していけば、いろいろな「ノニ」があることに気付く。(11)は、前後件の出来事が食い違いの対立をなしているが、例えば、次の例は前後件の対照を表わしている。

(12) 彼の方は同じプロセスでどんどん上に進んで行ってるのに、僕の方はずっと堂々めぐりしてるんです。 『森』(下)

しかし、(12)のような「ノニ」の対照用法は、逆接条件とは多少距離があるように思われるため、本稿では、(11)のように、「 p ナラバ q 」を前もって想定しての文である「 p ノニ $\sim q$ 」だけを対象とする。

今まで、「テモ」と「ノニ」の論理構造を調べてみた。特に、「テモ」に対しては、「 $\sim p$ テモ q 」の後件肯定型と「 p テモ $\sim q$ 」の後件否定型の二通りの「テモ」を認めて分析を行った。これらの逆接条件の論理構造を表にまとめたのが<表2>で、それぞれの真理値を示したのが<表3>である。

<表2>

	テモ		ノニ
	後件肯定型「 $\sim p$ テモ q 」	後件否定型「 p テモ $\sim q$ 」	「 p ノニ $\sim q$ 」
逆接仮定条件	$(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q)$	$(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset q)$	×
逆接確定条件	$(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q) \vee (\sim p \wedge q)$	$(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset q) \vee (p \wedge \sim q)$	$p \wedge \sim q \Rightarrow (p \supset q)$
反事実譲歩文	$(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q) \wedge (p \vee \sim p) \equiv q$	$(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset q) \wedge (p \vee \sim p) \equiv \sim q$	×

<表3>

テモ				ノニ				
後件肯定型「 $\sim p$ テモ q 」		後件否定型「 p テモ $\sim q$ 」		「 p /ニ $\sim q$ 」				
p	q	$(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q)$	p	q	$(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q)$	×		
1	1	1	1	1	0			
1	0	0	1	0	1			
0	1	1	0	1	0			
0	0	0	0	0	1			
p	q	$(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q) \vee (\sim p \wedge q)$	p	q	$(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q) \vee (p \wedge \sim q)$	p	q	$p \wedge \sim q \Rightarrow (p \supset q)$
1	1	1	1	1	0	1	1	0
1	0	0	1	0	1	1	0	1
0	1	1	0	1	0	0	1	0
0	0	0	0	0	1	0	0	0
p	q	$(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q) \wedge (p \vee \sim p) \equiv q$	p	q	$(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset \sim q) \wedge (p \vee \sim p) \equiv \sim q$	×		
1	1	1	1	1	0			
1	0	0	1	0	1			
0	1	1	0	1	0			
0	0	0	0	0	1			

以上のことから分かるように、自然言語では、論理構造が異なっても同じ言語形式「テモ」で現われたり、想定条件文の後件が成り立たない点で一見同様に見える後件否定型「テモ」と「ノニ」が実はその論理構造を異にしていたりするので、曖昧さは避けられないのであろう。

4 二通りの「テモ」間の意味内容の相違点

逆接条件「テモ」は、後件肯定型「 $\sim p$ テモ q 」と後件否定型「 p テモ $\sim q$ 」のどちらに取れる。例えば、聞き手が「テモ」文に接した時、「 $\sim p$ テモ q 」か「 p テモ $\sim q$ 」かのどれかとして受け入れることになるが、それは前もって頭の中で想定していた「 p ナラバ q 」との照らし合わせで決まることである。そして、「 $\sim p$ テモ q 」や「 p テモ $\sim q$ 」は、いずれにせよ想定条件文とのズレに対する意外さを感じられる逆接条件に取れるのである。

ここでは、<表2>と<表3>を参考に、逆接仮定条件・逆接確定条件・反事実譲歩文の相違点や、二通りの「テモ」の意味内容の相違点を探ってみよう。

<表3>の真理値からも分かるように、まず「 $\sim p$ テモ q 」における仮定条件は、 p と q がそれぞれ「1、1」「0、1」の時「1」になる論理構造である。 p と q が「1、1」とは、「 p ナラバ q 」の時であり、想定条件文が成り立っていることを表わす。そして、 p と q が「0、1」とは、「 $\sim p$ の時 q 」であることを指し、これは「 p ナラバ q 」の誘導推論つまり、「 $\sim p$ ナラバ $\sim q$ 」が成り立たないことを表わしているため、そこに意外さが生

じるのである。「 $\sim p$ テモ q 」の逆接条件や反事実用法においても、「 $\sim p$ テモ q 」の仮定条件と同じ真理値を持っている。ただ、確定条件における「1、1」は予測であって実際は「0、1」のようにになっている反面、反事実用法においては実際「1、1」でありここから「0、1」を予測している場合である。つまり、「 $\sim p$ テモ q 」の確定条件では、「 p ナラバ q 」であろうが、「現に $\sim p$ デアッテモ q デアッタ」ことを表わしており、「 $\sim p$ テモ q 」の反事実用法では、「 p ダカラ q デアッタ」が、「 $\sim p$ デモ q デアロウ」ということを表わしているのである。

次は、「 p テモ $\sim q$ 」における仮定条件であるが、 p と q がそれぞれ「1、0」「0、0」の時「1」になる論理構造をしている。この形式は「1、1」の時「0」になる構造つまり、想定していた「 p ナラバ q 」が成り立たない場合である。一方、「0、0」の時は「1」になり、「 p ナラバ q 」の誘導推論である「 $\sim p$ ナラバ $\sim q$ 」は成り立っている。この「 p テモ $\sim q$ 」は、前件 p がどうであれ想定条件文「 p ナラバ q 」は成り立たない場合である。「 p テモ $\sim q$ 」の確定条件や反事実用法の真理値も仮定条件の真理値と同じであり、想定条件文「 p ナラバ q 」は成り立たない。ただ、「 p テモ $\sim q$ 」の確定条件では、「 $\sim p$ ナラバ $\sim q$ 」であろうが、「現に p デアッテモ $\sim q$ デアッタ」つまり、 p と q がそれぞれ「1、0」であることを表わし、「 p テモ $\sim q$ 」の反事実用法では、「 $\sim p$ ダカラ $\sim q$ デアッタ」が、「 p デモ $\sim q$ デアロウ」つまり、 p と q がそれぞれ「0、0」であることを表わしている。

このように、「 p ナラバ q 」を想定しているといっても、「 $\sim p$ テモ q 」は、想定条件文「 p ナラバ q 」が成り立っているのに対し、「 p テモ $\sim q$ 」は想定条件文は成り立たない場合である。そのため、「 $\sim p$ テモ q 」では、 p 以外に $\sim p$ も q と結び付くところに、また「 p テモ $\sim q$ 」では、 p が q と結ばず $\sim q$ と結び付くところにそれぞれ意外さを感じるようになるのである。そして、「テモ」が「 $\sim p$ テモ q 」であれ「 p テモ $\sim q$ 」であれ、「前件がどうであれ」の意味を持っている。

ところで、今まで、「 $\sim p$ テモ q 」と「 p テモ $\sim q$ 」を分けてそれぞれの論理構造を調べてきたが、「 p ナラバ q 」を想定している逆接条件テモは、実際の文では「 $\sim p$ テモ q 」のようにも「 p テモ $\sim q$ 」のようにも取れることができる。例えば、3. 2では例文(6)を、「 p テモ $\sim q$ 」として捕えたが、(6)は「 $\sim p$ テモ q 」と捕えることもできる。

(6) 連休のあいだ取引先も人けがまばらな状態で、正直なところ、渉外にまわっても、成果はあがらない。しかし、問題は、気持、である。ヤル気、である。 『女』(上)

3. 2でも見た通りに、(6)は「 p テモ $\sim q$ 」と捕えられて、「涉外にまわれれば、成果はあがる」を想定している文と言える。一方、(6)を、「 $\sim p$ テモ q 」構造と見て、「涉外にまわらなければ、成果はあがらない」を想定しているとも言える。つまり、(6)を、「 p テモ $\sim q$ 」と見た場合の p と q は、それぞれ「涉外にまわる」「成果があがる」であるが、(6)を、「 $\sim p$ テモ q 」と見ると、 p と q は、それぞれ「涉外にまわらない」「成果があがらない」になるわけである。このように、「 p テモ $\sim q$ 」と「 $\sim p$ テモ q 」は、「 p ナラバ q 」を想定しているといっても、それぞれの p と q が異なっているため、「 p ナラバ q 」が実際一致するのではない。

そして、当然のことであるが、「 p テモ $\sim q$ 」と「 $\sim p$ テモ q 」の間には、若干の意味の差がある。(6)を、「 $(p \supset \sim q) \wedge (\sim p \supset q)$ 」の論理構造を持つ「 p テモ $\sim q$ 」と取った場合は、「普段は涉外にまわれれば成果はあがるはずだが、人けがまばらな状態だから、涉外にまわっても成果はあがらない」のように取れて、条件が条件として働かないことを表わしている。一方、(6)を、「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset \sim q)$ 」の論理構造を持つ「 $\sim p$ テモ q 」と取ると、「普段でさえ涉外にまわらなければ成果はあがらない。今は人けがまばらな状態だから、涉外にまわっても成果はあがらない」のように解釈できて、想定していた条件の逆条件が与えられても後件は成り立つことを表わしている。

逆接条件テモに関する今までの先行研究で「テモ」は、後件肯定型と後件否定型のうち、どちらか一つに属するものとして考えられてきた。これは、逆接条件テモを、実際の文で「 $\sim p$ テモ q 」一辺倒に取っても、「 p テモ $\sim q$ 」一辺倒に取っても都合のいいことから可能だったのだろう。しかし、逆接条件テモは、後件肯定型になるか、後件否定型になるかで意味上の違いがあり、別個のものとして両方を認めなければならないと考えられる。但し、逆接条件テモを、後件肯定型と見るか、後件否定型と見るかつまり、「 p ナラバ q 」の p と q をどのように取るかは文脈の情報によるものである。

5 おわりに

本稿では、逆接条件を表わす「テモ」と「ノニ」の論理構造を調べてみた。特に「テモ」に対しては二通りの「テモ」を認め、「 $\sim p$ テモ q 」の後件肯定型と「 p テモ $\sim q$ 」の後件否定型に分けて分析を行った。そして、「 p ノニ $\sim q$ 」は「 p テモ $\sim q$ 」と似ているところは多いと言えども、それぞれの論理構造は異なっているため、同様に扱うわけにはいかないであろう。とはいっても、「テモ」と「ノニ」の相違点を論ずる先行研究における「テモ」

は、後件肯定型「 $\sim p$ テモ q 」の「テモ」である。「テモ」と「ノニ」の相違点については今後の課題にしたい。

【注】

1. ここでは逆接条件文や譲歩文を合わせて、「逆接条件文」と呼ぶことにする。
2. 同じ立場を取るものに、坂原(1985)があり、両方とも逆接確定条件「テモ」は設けていない。
3. 鈴木は、「テモ」の規定条件も認めている。同じ立場を取るものに、草薙(1977)、才田(1980)、沼田(1986)、言語学研究会・構文論グループ(1986)がある。
4. 草薙は「テモ」を、鈴木と同様に「 $\sim p$ テモ q 」と見てはいるが、「テモ」の確定用法を設けていないところか鈴木と異なっている。
5. 草薙は、「するとしても」と「したとしても」を「しても」と分けて考察している。このうち、「したとしても」は「しても」と同様に、「 $p \perp q$ 」と「 $(p \perp q) \cdot \sim p \Rightarrow q$ 」の用法があるとしているが、「するとしても」に対しては、「 $p \perp q$ 」の用法だけを認めている。
6. 「 $(p \supset q) \wedge (\sim p \supset q)$ 」は、草薙(1977)の「 $p \perp q$ 」と等値であるが、論理記号「 \perp 」はあまり一般的ではないため、ここでは含意の論理記号「 \supset 」を使うことにする。ある論理式と等値の論理式はいくつも有り得る。
7. 誘導推論とは、「 p ナラバ q 」が「 $\sim p$ ナラバ $\sim q$ 」と推論するように誘いかける現象を言う。

【参考文献】

- 奥田靖雄(1988) 「文の意味的なタイプ」『教育国語』92 教育科学研究会・国語部会編
- 草薙裕(1977) 「自然言語における条件の論理構造」『計量国語学』11-3 計量国語学会
- ――(1983) 『コンピュータ言語学入門』大修館書店
- 言語学研究会・構文論グループ(1986) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(4)」『教育国語』84 教育科学研究会・国語部会編
- 小泉保(1987) 「譲歩文について」『言語研究』91 日本言語学会
- 小林賢次(1996) 『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 才田いずみ(1980) 「「のに」と「ても」」『紀要』3. アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター
- 坂原茂(1985) 『日常言語の推論』 東京大学出版会
- ――(1993) 「条件文の語用論」『日本語の条件表現』 くろしお出版
- 鈴木忍(1978) 『教師用日本語教育ハンドブック③ 文法I 助詞の諸問題1』 国際交流基金
- 田中寛(1989) 「逆接の条件文<ても>をめぐる」『日本語教育』67 日本語教育学会

田野村忠温(1991) 「「も」の一用法についての覚書—「君もしつこいな」という言い方の位置付け—」『日本語学』VOL.10 明治書院

戸村佳代(1988) 「日本語における二つのタイプの譲歩文—「ノニ」と「テモ」—」『文芸言語研究』言語編15
筑波大学文芸・言語学系

西原鈴子(1985) 「逆接的表現における三つのパターン」『日本語教育』56 日本語教育学会

沼田善子(1986a) 『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

—— (1986b) 「副詞句のとりたて—「と」「ば」「たら」「なら」と「も」—」『都大論究』23号

—— (1992) 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ5 「も」「だけ」「さえ」など—とりたて—』くろしお出版

前田直子(1993) 「逆接条件文「～テモ」をめぐる」『日本語の条件表現』くろしお出版

ALFONSO, Anthony(1966) *Japanese Language Patterns*, 上智大学

Allwood,Jeans;Lars-Gunnar Andersson;Osten Dahl(1977) *Logic in Linguistics* [公平珠躬、野家啓一訳(1979)
『日常言語の論理学』産業図書]

【用例出典】

藤堂志津子 『女と男の肩書』(上)(下) 文春文庫 『女』(上)

村上春樹 『ノルウェイの森』(上)(下) 講談社文庫 『森』(上)(下)